

智歯を自然挺出させ、ブリッジ支台に応用した一症例

熊本 S J C D 吉永 修

2011/04/26

1、智歯の応用 2、長期メンテナンス 3、資料の保存

インプラント治療が一般開業医にも広まり、欠損歯修復のファーストチョイスにインプラントを選択する先生が増えつつある。しかし、インプラントはあくまでも異物であり、病理学的には慢性炎症を起こしていることが証明されている。臨床的に問題がないにしても、インプラントがベストな材料であるとは言えない。ベストな材料は患者個人の臓器、つまり歯である。まず、天然歯（智歯）を応用できないか考えるべきである。

今回、右上7を重度歯周病のために抜歯し、智歯を自然挺出させ、ブリッジの支台歯として応用した症例を紹介する。

患者は38歳・女性で、1991年松橋に転勤したため、メンテナンスの継続をするために前医より紹介で当医院を来院した。しかし、患者自身はいろいろな問題点を抱えていたため、精査し、トリートメントプランを説明、同意が得られたので、1992年（4ヶ月後）より治療を開始した。右上7は重度歯周病が原因で抜歯した。抜歯すると6・3支台のブリッジとなるため、予後に不安があった。埋伏智歯の存在を確認したため、自然挺出させた後、7を支台歯に加えたブリッジを再作製することにした。年齢的に自然挺出の確信はなかったが、治療13年後、埋伏智歯が右上7の位置まで挺出したため、ブリッジを再作製した。再治療5年後（2011年2月）、右上3の根尖病変を主訴として再来し、現在再治療中である。

長期に患者の経過を追っていくと、自分の診療（診断・テクニック）のいい面・悪い面を診ることができる。これが一番の勉強となるのではないだろうか。